

涅槃經小本の翻訳者

岩 松 浅 夫

筆者が「涅槃經小本」と呼ぶもののうち、大本の略出本という欠本数種については先に論じた（『印仏研』第二十四卷第二号）ので、今回は前回紙数の都合で果せなかつた現存諸本の翻訳者について、主に出三藏記集の記事を検討しながら、論ずることにしたい。現存する涅槃經小本とは

- (a) 仏般泥洹經二卷 (大正藏 No. 6)
- (b) 般泥洹經二卷 (同 No. 6)
- (c) 大般涅槃經三卷 (同 No. 6)
- (d) 方等般泥洹經二卷 (同 No. 38)

の四本のことであるが、これらは現在の大正藏經ではそれぞれ(a)が西晋の白法祖訳、(b)は東晋の失訳、(c)は東晋の法顯訳、(d)は西晋の竺法護訳、とされているものである。

出三藏記集から開元釈教録に至る各経目録の間には、こと涅槃經小本に関する限りその記事に甚しい相違のあることは前に述べた通りであるが、この間に現れる翻訳者は、後漢の支謙（支婁迦讖）・魏の安法賢・呉の支謙・西晋の竺法護と白

法祖・東晋の法顯・劉宋の求那跋陀羅の七名で、これに東晋の失訳人を加えると、延べ八名ということになる。そのうち出三藏記集に記されているのは支謙・支謙・竺法護・法顯・求那跋陀羅の五名で、安法賢と白法祖は歴代三宝紀、失訳人は開元釈教録になつて初めて現れるのであるが、涅槃經小本の訳者としては、後の三名には次のような問題点がある。まず失訳人については、開元釈教録は、(b)の『般泥洹經』はそれまで求那跋陀羅の訳として上巻のみの一巻本として世に行われてきたのであるが、撰者智昇が八方手を尽した結果下巻を得たので上下の二巻とした、しかしその訳語訳文は支謙や竺法護のものに似て求那跋陀羅の訳とは到底認められないために已むなく東晋失訳録に組入れたのだと説明する。したがつて、この失訳人は初めからそのようなものとして伝わってきたのではなく、(b)の訳者査定の途上、求那跋陀羅に代るものとして已むなく現れてきたものにすぎない。次に安法賢であるが、この人物は歴代三宝紀に初めて登場するもので、そ

れ以前の出三蔵記集や同時代の法経・仁寿・静泰の各経目録には何ら闕説されていない。のみならず、歴代三宝紀においてもその伝記や紀年は全く不明で、訳として掲げられた『羅摩伽経』『大般涅槃経』の二本も出典が極めて曖昧なことなどから、人物の実在そのものにすら疑問がもたれるのである。なお、『略三大本前数品爲此二卷』云々の割注を有する後者が実際には(9)を指すのであろうことは前に指摘した通りである。最後の白法祖は、その名や伝記は出三蔵記集にも見られるが、そこでの訳本が欠本の『維逮菩薩経』一本に過ぎないので、歴代三宝紀では一挙に二十三部にも増えているのである。それらはいずれもいくつかの雑経録を調査した結果判明したものだと言者費長房は主張する。しかし実際には出典は何ら記載されておらず、またその掲げる訳本の大部分は出三蔵記集の竺法護の訳本に一致または酷似していることなどから、出三蔵記集の竺法護の項を中心に他の訳者のものもあわせて捏造されたという疑いが濃い。竺法護の訳本中には『方等泥洹経』二巻が見られるから、新たに加えられた中に見られる『泥洹経』二巻というのも、実際にはその改竄にすぎないのではないかと思われる。もちろん撰者がこのような訳本を実際に見たと思われる痕跡は全くない。

以上のことから、現存四本の涅槃経小本の翻訳者としては、出三蔵記集に現れる支謙・支謙・竺法護・法顯・求那跋陀羅

涅槃経小本の翻訳者(岩松)

の五名について考察すればよいということになる。とはいっても、ことはそれほど簡単ではない。というのは、現存諸本の関係などから出三蔵記集の記事を見ると、そこにはなお検討を要する点がいくつか存するからである。以下、その問題点を指摘し、筆者なりの考えを述べることにしたい。

まず第一は、右の五名の訳者のうち存本は支謙と竺法護兩名の訳本のみで他の三名はいずれも欠本とされているが、そこに問題はないかということ、具体的にはこれら三名には果して本当に涅槃経小本訳出の事実があつたのかということである。欠本が必ずしも散佚を意味するものではなく、中には撰者の未見にすぎないものや、散佚したと考えられても後になつて再び発見されるものもあることはいうまでもない。したがつて、現存四本の涅槃経小本のうち二本についてはいちおう撰者未見と考えることができよう。が、それとは別に、これら三名に果して涅槃経小本訳出の事実があつたかどうかということ確かしておく必要もあろう。とまれ、結論を先に述べると、支謙と求那跋陀羅については何ともいえないのであるが、法顯については、彼に涅槃経小本訳出の事実はなかつたのではないかということがいえるのである。というのは、法顯自撰の『法顯伝』の中には法顯がインドで取得した梵本として、梵文未訳のものも含めて出三蔵記集に記されたものは全て見られるのに、ただ欠本とされている『方等泥洹

經』二巻に相当するものだけは見られないからである。この欠本の二巻本というのは、おそらく六巻本の原本について述べた「又得一卷方等般泥洹經可五千偈」の文を、「又一巻の方等（泥洹經）と般泥洹經の五千偈なるべきを得」と二つに分けて読んだために現れたものではないかと思われる。

第二は、僧祐が実際に見たと思われる支謙と竺法護の訳本の内容に関する問題である。すなわち、これら両本は「新集異出經錄」の項で「大同」とされる一方、支謙訳『大般泥洹經』の下には「安公云出長阿含、祐案今長阿含与此異」という割注が付されているのであるが、現存諸本との関係を考えたとき、これらの記事が果してそのままに信用できるかということである。もしこれらをそのまま認めるとすれば、道安の見た支謙訳本は『遊行經』の異出本すなわち(a)(b)(c)のいずれかということになるが、僧祐の見たのはそれとは別本で、しかもそのような別内容の本が二本あったことになる。これを現存本との関係からもう少し具体的にいうと、僧祐は(d)およびそれと内容の異本（仮に(d')としよう）は二本とも見たが(a)(b)(c)の三本はどれも見ることはなく、しかも(d')はその後間もなく、すなわち法經錄の撰述以前に散佚してしまつたのに対して、代つて新たに(a)(b)(c)の三本が発見されたということになるのである。可能性としては皆無でないにしても、実際にこのようなことが起こるとは考え難い。そこで、

これらの記事にはどこかに誤りがあると考えの方が自然であろう。そしてこれに対して筆者は、結論として、「新集異出經錄」の記事には誤りはないが支謙訳本の割注には誤りがあり、そこにいう「長阿含」は実は「中阿含」の写誤（後世の）ではないかと考える。その根拠としては、(1)道安は曇摩難提訳『中阿含經』については、その訳出に尽力したこともあつて、内容等知つていたということは十分考えられるが、『長阿含經』は現存本が初めてのしかも唯一の訳であり、その訳出の前に死んでいる道安が長阿含の内容等について知つていたという可能性は薄く、したがつて道安錄に「出長阿含」とあつたということもかなり疑わしい、(2)道安錄に「出長阿含」とされていたという經典は外にもいくつか存するが、そのほとんどは現行の『長阿含經』とは一致せずむしろ『中阿含經』と一致するものが多い、(3)『中阿含經』はその後現行のものが僧伽提婆によつて訳され、旧訳はあまり行われなくなりやがて散佚してしまつたが、内容的にはかなりの相違があつたという。したがつてその中には(a)(b)(c)等とかなり内容の類似した經典が含まれていた可能性もある、(4)現在の『中阿含經』にも「涅槃經」という小經が含まれているが、内容は全く異なる。しかるに僧祐は道安錄に「出中阿含」とあるのを見て、曇摩難提訳でなく僧伽提婆訳の『中阿含經』について確かめてみたところが、その内容がまるで異なるためにこ

のような割注を付したのではないか、ということなどが挙げられよう。このような写誤は、その後の支謙訳本に対する扱いから見て、法経録や歴代三宝紀以前の比較的早い時期になされたものと思われる。また、道安の見た支謙訳本と僧祐の見たそれも、実際には同一のものだったのではなからうか。

ともかく、出三藏記集の記事をこのように訂正し、また訳語や訳文等を検討した上で、最終的に筆者は(a)を支謙訳、(b)を竺法護訳、(c)を求那跋陀羅訳、(d)を西晋失訳とすべきではないかと考える。実際、訳語・訳文の上からは(a)は支謙の、(c)は求那跋陀羅の他の訳本と類似する点が多く、これら二本については問題はない。(b)については、訳語上はあまり共通性を指摘することができないが、文体上は竺法護特有のものが見られるし、その訳出も竺法護の比較的初期の頃のもので、それ以前の支謙訳本を参考にしたことなども十分考えられるので、用語等が一部(a)と共通し、また後の竺法護の訳本とあまり一致しないとしても、それほど大きな問題ではない。ただ(d)については、支謙訳で欠本の『胡般泥洹経』というのが実はこのことではないかということも考えられるが、『阿闍世王経』とはともかく『道行般若経』等との間には訳語・訳文ともに相当のずれがあり、むしろ西晋代のものに近い。それ故(d)は、『阿闍世王経』ともども)西晋代の失訳と見るのが妥当であろうと考えるのである。

涅槃経小本の翻訳者(岩松)

執筆者紹介(五)

- | | |
|-------|------------------|
| 望月一憲 | (東京医科歯科大学教授・文博) |
| 渡部孝順 | (寺院住職) |
| 天納傳中 | (叡山学院助教授) |
| 中尾正己 | (跡見学園女子大学兼任講師) |
| 石原斌夫 | (愛知県立一宮商業高等学校教諭) |
| 藤谷大圓 | (寺院住職) |
| 菊藤明道 | (京都短期大学助教授) |
| 冠賢一 | (立正大学助教授) |
| 庵谷行亨 | (立正大学助手) |
| 黒丸寛之 | (駒沢大学助教授) |
| 伊藤秀憲 | (駒沢大学助手) |
| 遠藤孝次郎 | (早稲田大学卒) |
| 神戸信寅 | (愛知学院大学講師) |
| 東隆真 | (駒沢女子短期大学教授) |
| 田中敬信 | (曹洞宗宗学研究所) |
| 石川力山 | (駒沢大学助手) |
| 中山清田 | (東洋大学東洋学研究所研究員) |
| 八田幸雄 | (大阪府立三国丘高等学校教諭) |

(二八四頁につづく)